

第6回 小中学校の接続・連携に関する調査研究委員会の概要

◆日時 平成30年11月1日（木曜日） 午後3時30分～

◆場所 市役所本庁舎 6階 第2会議室

◆出席委員

氏名(敬称略)	所属 職名	備考
本 図 愛 実	宮城教育大学 教職大学院 教授	委員長
熊 谷 和 彦	東北福祉大学 教育学部 准教授	副委員長
佐々木 静 輝	仙台市立三条中学校 校長	
佐々木 賢 哉	仙台市立四郎丸小学校 校長	
永 見 幸 久	前仙台市立柳生中学校PTA会長 前仙台市PTA協議会 副会長	
高 城 み さ	仙台市立鶴が丘小学校PTA会長 仙台市PTA協議会 副会長	
佐 藤 慶 子	住吉台中学校区 学校支援地域本部 コンパス住吉台 スーパーバイザー	
安 藤 直 美	愛子・錦ヶ丘小学校 学校支援地域本部 めですこSCHOOL スーパーバイザー	

◆配布資料

- ・最終報告書 構成(案)(資料1)
- ・最終報告書 提言の骨子(案)(資料2)
- ・第1回～第5回 小中学校の接続・連携に関する調査研究委員会【議事録より抜粋】

◆会議の概要

1 開会 午後3時30分 (司会:田辺)

2 あいさつ 学校教育部部长 杉山勝真

- ・これまでの5回の議論を踏まえて、最終報告書の提言作成に向け、意見をお願いしたい。

3 協議・報告

- ・署名委員は佐藤委員に依頼

(1) 小中学校の接続・連携に関する調査研究委員会 最終報告書 構成(案)について 資料1

構成(案)について、事務局丸山より報告を行う。

- ・構成については、個々の内容を確認いただいたところで、修正を加えていく形とする。先に資料2について、報告を願いたい。(本図委員長)

(2) 最終報告書 の提言の骨子(案)について 資料2

提言1(案)について、事務局丸山より報告を行う。

- ・これまで議論してきた内容や委員の思いが組み込まれている。キーワード等を見ていただき、もっとこの辺がというところについて意見を頂きたい。(本図委員長)
- ・昨年度の小中一貫サミットの視察で、「しんどい子を真ん中に」という西川先生の言葉があった。本委員会の委員より、素敵な発想だという意見もあった。そのような発想も大事であると感じる。骨子案の中で系統性や継続性という言葉を使っている。包括的なきれいな言葉だが、本文に入ってきたときに、どの子ども認められる、自己肯定感が保障される授業や授業外の場面が組み込まれた魅力的なカリキュラムを作成すること。すべての子供たちが認められる、自己肯定感が保障されるインクルーシブ教育ということも担保できるカリキュラムが大事である。どの学校でも当たり前のことだが、あえて新たな試みの時に、もう一度出しておくことも良いかと考える。また、先生方にとってはどの子ども認めていく、自己肯定感を保障し

ていくということは、教科の指導力が必要であり、モデル校は指導力を向上させていくチャンスになる。魅力的なカリキュラムの下で教科担任制を一部さらに強化しながら、先生方の指導力の向上につながる。日々の授業の中ですべての子供が認められているので、特にインクルーシブの視点から、子供を受容する力があるといったストーリーが頭の中で浮かんできている。学校として当たり前のことだが、そういう言葉も本文の中に入ってくるといい。(本図委員長)

- ・ 「地域で過ごす子供」という視点がちょっと間違えると、狭い意味でとられてしまうのではないか。(佐々木賢委員)
- ・ 小学校の先生からみると「小学校の児童」、中学校の先生から見ると「中学校の生徒」という見方である。しかし、地域の方々から見るとすべての子供が「地域の子供」という視点で見ている。先生方にも地域の方々の目線で子供たちを見てほしいと考えている。(事務局丸山)
- ・ 「地域で過ごす子供」という言葉は、これまで会議の中で、何回か使ってきている言葉である。狭い意味で捉えられないように、良い言葉はないか。(本図委員長)
- ・ 「地域で育つ子供」という言葉ではどうか。(安藤委員)
- ・ 学校で過ごす時間が長いので、どうしても「過ごす」という言葉は短い時間のイメージがある。今、提案いただいた「育つ」の方が良いのではないか。(佐々木賢委員)
- ・ 「地域で育つ子供」で良いのではないか。変えることで、最終報告書の中で不整合が出てくるのであれば、整合性を合わせる作業をお願いしたい。(本図委員長)
- ・ 昨年度の会議で、縦軸が小中連携、横軸が地域連携という説明があった。小中連携のところで、教員の教科指導力が重要である。もう一方として、学級経営力も重要であると感じている。そのとき、(1) 系統性・継続性を生かした取組について「ii 小中学校のギャップ」のところが、先生方のレベルの話が中心になっている。子供の発達段階の違いで、教員の指導の仕方や小中学校の指導方法も変わってくる。ここに、子供の観点も入ってくるといいのではないか。インクルーシブ教育、すべての子供たちが、教員の学級経営力が伸びてくることで、お互いを認め、お互いの人権を認め合うことができるようになる。小学校の先生たちが行っていることを中学校の先生が見て学んで、中学校の育て方を小学校の先生も学ぶような、学級経営力の向上でも交流ができると良いと感じる。(佐々木静委員)
- ・ もう少し「子供たちの発達段階」といった言葉が入ってくると具体的に良いのではないか。もちろん学級経営力も適切な所に入れていく。カリキュラムのところか、または新たに項立を行うか検討が必要である。(本図委員長)
- ・ 「(1) ii 系統性・継続性を生かしたカリキュラムの作成」に教科指導を入れることはできる。また、学級経営力は「(3) 生徒指導」に、入れることはできる。(佐々木静委員)
- ・ 教科指導力と学級経営力を対の形で入れていく。それをますます充実させていくことが大事であることを盛り込む。(本図委員長)
- ・ 小中連携教育や小中一貫教育の背景に、「子供の発達段階が変わってきている」というところがある、そこをうまく入れながら提言を作成していくことも考えられる。(春日室長)
- ・ 子供たちの発達が速くなったというところが、背景としてある。心の発達とからだの発達がマッチングしていないという現状が背景として言える。(本図委員長)
- ・ 本委員会の目的に、「仙台ならでは」の小中連携、小中一貫というのが根本にあった。ベースになってくるのは、「第2期仙台市教育振興基本計画」である。それがベースになれば、仙台ならではにならない。本市の継続的な課題として、いじめ・不登校対策の充実、学習意欲、自己肯定感の低下、学力向上が挙げられているが、提言の骨子にもある程度バランスよく組み込まれている必要がある。要素としてあると「仙台ならでは」のものとなる。(熊谷副委員長)
- ・ 「仙台ならでは」のというところで、教育振興基本計画では「切れ目のない教育の推進」を打ち出している。今、提案された不登校や自己肯定感などの要素を背景として組み込んでいくのか、あるいは項を起こして入れていくのか検討していく。(春日室長)
- ・ 「仙台ならでは」というと、学びの連携や自分づくり教育、仙台子ども体験プラザの活用、たく生きとかキャリア教育も学習意欲の向上というところで一生懸命やってきたことである。それは4(2)「学びの連携事業」について、に入ってくるのか。(本図委員長)
- ・ これまでの議事の中で、カリキュラムづくりとして、「仙台ならでは」を活かすため、自分づくり教育を柱

にしていくという意見もあった。それが学力向上や自己肯定感の高まりにつながるというところを、学力向上の項目がいいのか、カリキュラムの項目がいいのか、どのような形で組込んでいくかべきを検討していく。(春日室長)

- ・ 提言の中では、抽象的でも良い。本市の現状のところでも手厚く記載した方が書きやすい。提言の部分でこうしなければいけないと入れすぎると、アクションプランが立てにくくなる。(本図委員長)
- ・ 「(4) 教職員の相互理解」について、i小中学校の違いを認め合うの部分が、具体性に欠ける。もともと子供の発達段階が違うので、違いがあるのは当然である。歩み寄ることで相互理解が深まるが、どのような形で交流するとか具体性を感じられる表現になると良い。同様に「(3) 生徒指導」について、「i情報の引継ぎ」のところでも同様なことが言える。コメントも加えながら、具体的に書けるといいのではないか。(永見委員)
- ・ このような部分で抽象的になってしまうと、精神論になる。先ほどの教科指導や学級経営力をお互い、どのように切磋琢磨したり、融合したり、有機的にやっていけば良いか、どのような知識とスキルが必要かを入れ込むことが必要である。例えば、生徒指導については、このような方法があるという例示を入れ、具体性を持たせるのが良い。(本図委員長)
- ・ 「(2) 学力向上」の「iii教科担任制」は、小学校の先生方だけで行う教科担任制ではなく、連携している中学校の先生が、小学校の授業に音楽や図工の教科担任を行うようなことや小学校の先生が中学校で授業をする。可能な範囲で、お互いに先生方が乗り入れ授業をすることで、授業を通して子供たちを見られるようになる。また、「(4) 教職員の相互理解」の「iii連携の必要性の実感」のところ、小学校の先生から中学生が「成長したな」という言葉をもらうことで、子供たちにとっても、成長の実感につながる。中学生が発表会を行うようなときに、積極的に小学校の先生が参加し、先生方が子供たちの成長を実感するとともに、先生方から褒めてもらうことで、子供たちにフィードバックするような仕掛けがあると、小中連携する意味が高まる。成長の実感を先生方も、子供も感じることができるようになる。(佐藤委員)
- ・ 成長を実感できる仕掛けは、これまでも様々な学校で行っている。提言の中に、こんな場面で活用できるという例示をしていくことで説得力が増す。小中学校の乗り入れ授業は、教科の指導力をお互いが学び合う機会となる。中学校の先生は、小学生に今の学習が中学校の授業につながることを動機づけできる。小学校の先生は、専門性の高い中学校の先生が指導する内容を見ることで、学ぶことができる。(本図委員長)
- ・ 乗り入れることで、小学生にとっても中学生の学習をイメージすることにつながる。(佐藤委員)
- ・ 気付いた点があれば、また戻っていただき、次の提言2に進むこととする。(本図委員長)

提言2 (案) 資料2について、事務局丸山より報告を行う。

- ・ 試行校としては、小中一貫校であって、義務教育学校ではないととらえて良いか。(本図委員長)
- ・ 閑上義務教育学校を見てきたが、理想的にはひとつの箱の中でやっていければ良いが、現実的には規模や費用の問題もあり、義務教育学校は難しいと考える。(春日室長)
- ・ 調査報告のまとめの中で、本市では義務教育学校よりも小中一貫校の方が、可能性が高いとまとめるか、提言の中で示すか、どちらが良いか検討が必要である。(本図委員長)
- ・ 調査報告の中で記載することは可能であるが、中心は6の提言であるので、そちらで記載することもあり得る。今後の話し合い次第であると考えている。(春日室長)
- ・ 小中一貫校となると「おらほの学校がなくなる」という感覚はそうなのか。むしろモデル校にもなるので、パワーアップする感覚ではないか。(本図委員長)
- ・ おらほの小学校は無くなって、小中一つの学校になるということ、保護者や地域の方がどのように捉えるかである。学校の場所も変わることもありあえる。保護者や地域の方に対し、丁寧に説明、対応して必要があると感じる。(事務局丸山)
- ・ 中学校が無くなることもあり得るのか。2つの中学校が入ることもあるのか。そうすると学校が無くなるというのは分かる。学校の足跡を残すことも大事である。(本図委員長)
- ・ 視察した閑上小中学校は、以前の小学校と中学校の校章を掲示していた。(事務局丸山)
- ・ 中学校は同窓会が強いところもあり、地域の方々に小中一貫校というシステムをどこまで理解していただけるか問題である。(安藤委員)

- ・ 小中一貫校設置に伴う保護者や地域への説明を十分配慮しながら、丁寧に行うことについての記載をすることは大事である。(本図委員長)
- ・ 仙台市が小中一貫教育を進めていくに当たって、どのような校区で区切るかという問題がある。京都の場合は複数の校区で3,000人の児童生徒がいるところでは、なかなか運営が難しいとの話も聞いている。仙台でも、くっきり分かれる校区と複数中学校にまたがるケースがある。小中一貫教育の成果をすべての学校で活かすようにしていくことには、ネックになるところもある。指定校だけがやって、他の学校ができないというのでは、もっと調査研究委員会としても何か知恵を出さなければならない。「(2) 地域とともに歩む学校」は大切な事である。今も学校支援地域本部が学校のために協力していただいているが、もっと大きく地域を巻き込んでいくためには、学校評議員や学校支援地域本部、PTA、町内会を含む地域教育協議会を目指していくような、横の連携を視野に入れた提言ができればと思う。(佐々木静委員)
- ・ 校区がどう難しいか、いろんな地域団体と連携していくことが大事である。試行校の成果が、他の学校では到底真似できないということにならないようにしなければならない。試行校だからできたが、教科指導力や学級経営力を小中で高めていくということを、ちょっと形を変えれば、他の学校でも工夫次第でできるということを伝えられるようなモデル校にしていきたい。モデル校では資源が投入されているからできるのではないという形にしたい。(本図委員長)
- ・ 「(2) 地域とともに歩む学校の体制」について、「地域の学校の立場」の視点で、小中一貫校になることで、地域のためにも、子供のためにもなることが大事と記載してあるが、子供のためになるというのは、これまで何回も出てきている。しかし、何が「地域のためになる」のかを聞かれた時、何と答えれば良いか。地域の人たちとすれば、地域が広くなり、今まで関わらなくてもよかったところと関わる必要が出てくると感じるのではないだろうか。何が地域のためになるのだろうか。(安藤委員)
- ・ 今、小学校でやっている学校支援が、中学校区で行うことになれば、中学校区に広がることで支援の人材が豊富になり、支援の幅が広がる。また、連合町内会として動けるので、地域のサポートも強力になる。中学校区で学校支援の形を創ろうという動きがある。小さな範囲の連携から、より大きな範囲の連携が可能になる。(春日室長)
- ・ それは学校のためにはなるが、地域のためにはなるか。(安藤委員)
- ・ 地域のネットワークが強化され、学校支援地域本部のスーパーバイザーを支える仕組みができてきているとの話もある。(春日室長)
- ・ 身近な一例として、地域の小・中学校に来賓として、それぞれ呼ばれた場合、合わせる顔はほとんど同じである。小中一貫になれば、それが一度で済むことになる。運動会だったり、行事に別々に足を運んでいたが、小中一貫になれば一度で済むことになる。また、日々のボランティアの人材も小学校と中学校に分散している状況であるが、一つの学校に全員が力を貸していただけることにつながる。(高城委員)
- ・ いい意味で、今ある団体が整理されて、これまで3回やっていたことが1回で済んだというような効率化・能率化が図れたという報告もある。(春日室長)
- ・ ネットワークが広がり地域の団体が精査され、うまく回っていくことが大事である。しかし、モデル校立ち上げ当初は行政がサポートしたり、NPOが絡んで潤滑油になるなど、当初の実質的なサポートは必要である。(本図委員長)
- ・ 地域力を高めることを一律にやっていくことは難しい。そのためコーディネートすることを市で考えたり、先生方への研修を行うことは必要である。(春日室長)
- ・ 教員の研修はすぐにできることである。(本図委員長)
- ・ 「(6) コミュニティ・スクールと小中一貫教育」について、コミュニティ・スクールは「学校と地域をつなぐ取組」であり、小中一貫教育は「小・中学校の児童生徒間、教職員間をつなぐ取組」というのを見て、「(2) 地域とともに歩む学校の体制」を見ると、いずれ小中一貫校はコミュニティ・スクールを目指しているのかというように見えるが、どうなのだろうか。もしそのような方向であれば、はっきり明示したほうが良いのではないか。(永見委員)
- ・ PTCAの考え方が大事である。学校だけでなく、保護者、地域が入り、地域総ぐるみで子供を育てていくというところは、コミュニティ・スクールと小中一貫教育をタイアップして行っていく中で、地域総ぐるみで子供を育てていく体制は、より一層強化されるのではないかと考えている。(春日室長)
- ・ 小中一貫校が児童生徒をつなぐだけでなく、地域の横のつながりをつなぐものである。もっと地域の方々

の意見を取り入れながら、コミュニティ・スクールに発展することもある。(佐々木静委員)

- ・ 提言では、そのような記載にとどめる。あくまでも小中一貫校がコミュニティ・スクールになることを否定するものではない。(本図委員長)
- ・ 「(4) 学びの連携に活かせる仕組みの構築」が、仙台独自のものとなる。学校独自で特色を持って、小中連携では9年間目指す姿がより明確になっていくような、一歩進めた形になることが大事である。本校で学区変更があり、地域の方の力の大きさを感じている。子供たちの通学路等について、町内会長さんの理解を頂いたり、町内会の行事や子供会行事について、体振などたくさんの地域団体の協力も頂いている。小中一貫校では、そのような地域団体の制度的な部分も絡んでくるかと考える。(佐々木賢委員)
- ・ 提言1と提言2が別物にならないようにすることが大事である。「学びの連携」が大事であり、そのために教科指導力や学級経営力をつけることで、魅力的なカリキュラム作りにつながる。小中一貫校の成果を市内全ての学校に活かす取組を行うことで、「学びの連携」のより一層の推進につながることを記載する。(本図委員長)
- ・ 「(3) 試行校の評価」について、これまでの議論の中で制度的な部分は共有できていると感じるが、小中一貫校で育まれた子供は自分を振り返って、「小中一貫校で学んで、どうだったか」という部分が評価の視点として大切にしたい。「(5) 試行に当たっての配慮事項」について、カリキュラム作成とあるが、教育課程の編成権は校長にあるので、市教委がバックアップするとの記載があると、市教委主導の一貫校かと誤解を招く恐れがある。(熊谷副委員長)
- ・ 小中一貫校は「子供のため」というところが軸である。骨子案の中で系統性、体系性と記載してあるが、これからの学校とカリキュラムはコンピテンシー、「何ができるようになったのか」の「何が」が大事である。社会に開かれた教育課程と言われるが、自分が希望とともに自己肯定感を持って世界と関われるような力を子供たちに身に付けさせたい。カリキュラムの中に、小中で一貫教育を行うことによって、仙台市や宮城県や東北、世界と関わり、問いや学びにつながるということを、子供の成長、子供のため、21世紀型コンピテンシーが保障されるような学校をみんなでつくり、そのつくり方を他の学校も真似していくような形を構築する。カリキュラムとしても、「問いで貫く単元構成」のようなものも出てきたとき、自分で問いを立て、解決していくようなカリキュラムを作るには、学校だけで考えなさいというのではなく、委員会も含めバックアップが必要であるといった趣旨を共通理解したい。(本図委員長)
- ・ カリキュラムについては、各学校が作成する参考例として作成することを考えている。表現については精査する。(春日室長)
- ・ 小中一貫校の評価については、学校の内部評価だけではいけないのではないかと。第三者による外部評価、一般の学校との比較したりするような、評価する人たちも必要なのではないかと考える。(佐々木静委員)
- ・ 一貫校とその他の学校の比較研究や一貫校での活動が汎用性があるかないかなど、調査研究を一貫校の先生方に任せず、外部委員による評価を行うという発想は良いのではないかと。一貫校の先生方の評価に係る負担も減ることは良いことである。(本図委員長)
- ・ 小中一貫校について、調査研究委員からは理念論を伝え、規模とか校区、校数、年次等のアクションプランは、別段階で事務局で考えていただくことで良いか。(本図委員長)
- ・ 評価していく方法について、検証委員会を別途立ち上げたり、学校運営協議会の中に評価委員会を設けていくかについては、今後検討していく。小中一貫の成果が連携を行っているところうまくフィードバックできるような仕組みをつくるのが大事である。(春日室長)
- ・ より高いレベルの学習へ、という話がたくさん出ているが、中学校ぐらいから勉強についていけず、学校に行きたくなる子が多い。例えば、小中一貫のシステムだったら、中学生がわからなくなったところに戻って、小学校の先生が指導することができるようなカリキュラムが組めるということなのか。グローバルという形も素晴らしいが、どうせやるなら不登校一人もいないというのを目指すのも素敵だと感じる。そもそも学校に通うのが楽しいと思えるような環境づくりが必要である。(安藤委員)
- ・ インクルーシブとも関わっていて、少しゆっくり進んでいきたい、その中で、受容されたいということである。それは、学級経営力、学年経営力につながるので、行事等の仕掛けの中で、可能であると考え。(本図委員長)
- ・ そういう子供一人一人の特性に合わせた小中一貫であれば、地域の協力や理解も得やすいのではないかと。(安藤委員)

- ・まさに「第2期仙台市教育振興基本計画」の要素の一つである。不登校やいじめがゼロになることは望ましいが、発現率が小中一貫校だと一般の学校と違いがあるといった部分が一つの評価につながってくる。それこそが「仙台ならでは」につながっていくと考える。(熊谷副委員長)
- ・他に、事務局も含め、検討事項等はないか。(本図委員長)
- ・仮に小中一貫校で、試行校が始まった時に、校長が小学校籍と中学校籍にそれぞれいる方法と校長が兼務する方法がある。試行が決まってから考えていくが、校長一人の方が意思統一ができる。また、加配教員の配置が可能かどうか検討していく必要がある。(春日室長)
- ・豊里小中学校は校長一人である。代わりに、校長をサポートする管理職を手厚くしている。(本図委員長)
- ・仙台市民がこのような学校であれば、地域を越えて応援したいと思うような夢を語ってほしい。不登校ゼロ、学力向上、インクルーシブなど、委員から他にはないか。(本図委員長)
- ・小中学校の文化の違いがあるため、どちらかの校長一人だと、片方の意見が出にくくなる可能性がある。そのため、最初はそれぞれの籍に校長が居て、相互理解が進んできたら、最終的に一人の校長にするのが良いのではないかと。(佐藤委員)
- ・小中学校の両方の免許を持っていて、小学校校長、中学校校長の両方の経験がある方が校長になるのが良いのではないかと。(本図委員長)
- ・これまでの議論の内容をまとめていただき、提言に盛り込んでいただくことを、事務局に依頼する。(本図委員長)

以上

4 事務連絡

第6回調査研究委員会 1月18日(金) 15:30~17:00 会議室

5 閉会 午後5時51分

◆マスコミ：河北新報、ミヤギテレビ、東日本放送

◆傍聴：なし

平成30年/2月/3日 署名委員

佐藤慶子

